

挑戦的な課題や学び合いを通して 学びに向かう力を育む

東京大大学院教育学研究科教授 秋田喜代美

生涯にわたって学んでいく力の基盤となるのが、幼児期から小学校低学年で培われる「学びに向かう力」だ。文字や数と違い、目には見えにくいこの力をいかに育んでいくべきか、東京大大学院教育学研究科の秋田喜代美教授にポイントを整理してもらった。

■ 保幼小接続の重要性

幼児期は「学びに向かう力」の土台を育む重要な時期

幼児期の体験を受け止めて子どもの力を育む上で重要になるのが、「学びに向かう力」です。学びに向かう力には、自己主張をしたり、相手の話を聞いて共に学んだり、新しい環境に適応したりといった力が含まれ、文字や数などと違い、容易に目に見えて分かるものではありません（図1、2）。しかし、生涯にわたって学び続ける力の基盤として、幼児期から小学校低学年の時期に育むことが大切です。そのため、保幼小の接続期には、幼児期に培った学びに向かう力を引き継ぎ、更に

伸ばすという視点が必要になるでしょう。

日本の小学校教育は、どちらかというと、学びに向かう力よりも生活習慣や文字、数などの習得に目が向きがちでしたが、今、世界的な流れを受けて変わりつつあります。OECDは、生涯学習の力として「自律的に行動する」「異質の他者と協働的にかかわる」「道具を状況に応じて使えるようになる」といった力が大切だと提言しています。いずれも、学びに向かう力と深くかかわっています。特に、5・6歳での教育が人生に及ぼす影響は大きな議論的であり、接続期の教育プログラムが検討されています。例えば、イタリアのエミリア地方幼児学校では子どもの創造性の伸長に重点を置く教育アプローチを

図2

学年ごとの学習準備

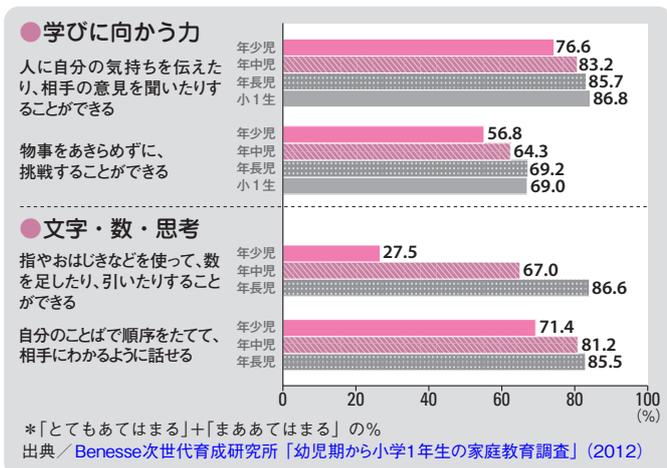
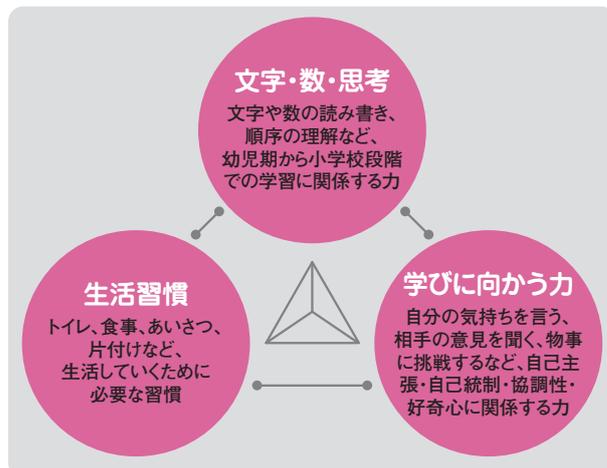


図1

幼児期に必要な学習準備



学びに向かう力を伸ばす新1年生指導



あきた・きよみ◎東京大大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は教育心理学、授業研究。立教大文学部助教授などを経て現職。主な著書に、『学びの心理学―授業をデザインする』（左右社）、『教える空間から学び合う場へ』（東洋館出版社）、『教師の言葉とコミュニケーション』（教育開発研究所）など

とっていますし、ドイツでは個人差を大切に
した「フレキシブル・スタート」によって小
学校教育を始めています。

世界的には、探求的な活動を重視したプロ
ジェクト型の教育プログラムが主流となりつ
つあります。日本でも、低学年から子どもは
どの教科でも問題解決や探究学習が大好きで
す。これからは、学びに向かう力を十分に育
むことを考え、子どもがわくわくする活動を
より充実させる必要があるでしょう。

1年生が伸びる指導ポイント①

友だちの考えを聞いて 見方を広げていく授業を

次に、1年生で授業を通して学びに向かう

力を育むために大切なことをお話しします。

まず重要なのが、「学校で学ぶとはどのよ
うなことから学ぶのか」を学ぶこの時期に、これからの
時代に合った学習観を身に付けることです。
伝統的な授業は、机の上に教科書とノートを
置き、子どもがそれぞれ自分の頭で考えると
いうものでした。もちろん、習得は極めて重
要ですが、21世紀型の教育は、同時に「学び
合う集団」として、子どもが考えを聴き合い
ながら学習を進めることが求められます。教
室に30人いれば30通りの見方があり、それら
を分かち合うことによっていろいろな見方が
出来ることを実感させるのです。

そのためには、1年生から友だちの考えを
聞いて学んだり、それに対して異なる意見を
言ったりと、仲間と学び合い、共に考える力

を育む必要があるでしょう。児童全員が先生
の方を向き、話を静かに聞くのが良い学級の
ように言われることがありますが、これは誤
解です。本来、子どもは友だちの意見も聴こ
うとする姿勢で授業に臨むべきだと思います。

幼児期は、「面白い、うれしい」「困った」
など、自分の気持ちを表現することが学びに
向かう力になるとされています。それが小学
生になると、気持ちに加え、自分の考えを論
理的に伝えることが求められます。それには、
自己統制力が必要であり、特に自分の感情を
抑えて相手の話を聞くことが重要です。自分
の思いは言っても、異なる意見が出てくると、
不満に思ってしまう中々でさえぎったり、聞かなく
なったりする子どもがいますが、それでは見
方は広がりません。異なる考えが出た時に自
分はどう考えるのかを、きちんとさせるとよ
いでしょう。

先生が「はい、はい」と挙手する子どもた
ちを受け止めて認めることはもちろん大事で
すが、そうした子どもが答えを言うだけでは、
学級全体の考える力は伸びません。「いくつ
も考えられるから、まずは心の中で何通りも
言ってみよう」「友だちと考えを確認してみ
よう」と発問をして子どもが落ち着いて考え
て発表できる環境をつくり、子どもに主体性
を発揮させて自信を持たせてあげてください。

そして、良い発表をした子どもだけを褒め
るのではなく、「Aさんはうなずいてよく聞

「聞いていたよ」などと聞く側を評価する指導も効果的です。また、イエスカノーで答えられる質問だけではなく、「あなたはどうか考えるのか」など、子どもの考えが広がる開かれた質問を心掛けるとよいと思います。

1年生が伸びる指導ポイント②

子どもが学びがいを感ずる 挑戦的な課題も必要

子どもが意欲を持って取り組める「挑戦的な課題も積極的に取り入れましょう。これは、先の内容を教えることではなく、子どもが学びがいを感ずられる課題です。教育学者のロバート・ピアントは、小学校低学年の先生は、情緒的な支援に力を入れるあまり、教授内容が易すぎると指摘しています。これは学習面でも同様で、挑戦的な課題をあまり提示していないようです。答えがすぐ分かる課題では、子どもの力は十分に伸ばせません。そのような課題を繰り返し返せば答えを早く出せるようになるかもしれませんが、創意工夫は生まれないでしょう。

例えば、1人に教科書を読ませ、「すらすらと大きな声で読めたね」と先生が評価するだけだと、「すらすらと読む」「大きな声で読む」ことが良いとしか、子どもには伝わりません。一方、複数の子どもが音読し、「読み方はどう違ったか」と質問すれば、子どもか

らいろいろな考えが出てきますし、「自分が読む時はこうしよう」と考えます。そのように意味を考えさせることが大事なのです。文字も、「あ・い・う・え・お」と1文字ずつ教えるのではなく、2文字示して「どこが似ているかな」「他に似ている文字はあるかな」と言うと、子どもは自分で類似性を考えようとします。また、2人で1枚のワークシートに取り組めば、考えを1つにまとめるなど折り合いを付ける必要が生じます。

このように、挑戦的な課題は特別な準備をしなくてもほんの少しの工夫でつくれます。物事に挑戦する気持ちは、初めは幼児期に遊びの中で培われます。小学生になったら一歩進んで、ただ挑戦するのではなく、自らの目標を持ち、最後まで諦めずにやり遂げたり、達成までの手立てを自分で考えたりすることが求められることも意識してください。

学力が低い子どもでも、面白い課題に出会うと夢中で取り組みます。その授業を通して自信を持てれば、「学校に行きたい」という気持ちが生じます。そのような課題を用意することが、教師の大切な役割なのです。

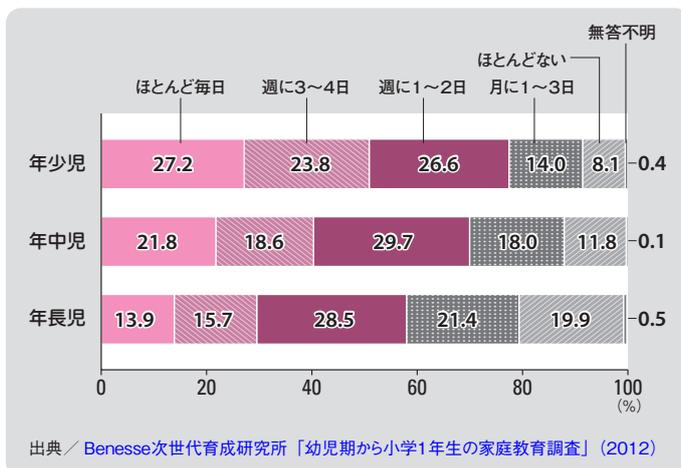
1年生が伸びる指導ポイント③

文字が読めても1・2年生には「読み聞かせ」が大切

本に親しませることに意識的に取り組ま

せたいものです。子どもが成長するにつれて、読み聞かせの量は減っていきます。小学校に入ると、文字を学び、一人読みをさせることが多くなり、読み聞かせは更に減ると思われまます(図3)。ところが、海外の調査では、1年生への家庭での読み聞かせや保護者の読書量が、PISSAの読解力に影響を与えているというデータがあります。読み聞かせは幼児期で終わりではなく、1・2年生に効果的な方法を考えた方がよいかもしれません。また、この時期に、子どもの関心は絵本から活字本へと移行しますが、物語だけではなく、科学や社会の本へと開口を広げることも大切です。

図3 親の絵本や本の読み聞かせ頻度



学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

イギリスのデータでは、月に4冊の本を読むと、読書を楽しんでいると感じ、「自分は good reader（よい読み手）である」という自己評価も高まるとされています。そこでイギリス政府は、月4冊の読書を推奨しています。たくさん読むのは大変ですが、週1冊なら無理はないでしょう。学校や家庭で積極的に子どもを読書に誘うようにしてください。

新1年生の保護者に伝えたいこと

保護者の協力が

円滑な小1スタートの鍵

子どもが充実した小学校生活を送るためには、保護者の協力も欠かせません。情報提供をしっかりして、保護者との信頼関係を築くことが重要です。保護者は、日々保育者と接していた園と比べて、小学校では学校からの情報が少なくなるという感覚を持ちますし、特に第一子の入学時の不安は大きいものです。子どもだけでなく、保護者も園から小学校に移行するという意識で、1年生の4・5月はいろいろな情報を公開し、子どもが学校でどのように過ごしているかを伝えましょう。保護者の学校や教師に対する信頼感は、子どもにも影響を与えます。保護者が子どもに「よい学校や先生だね」などと言えば、子どもは意欲を持ち、教育の効果が高まるからです。ですから、保護者には、子どもに「学校

は楽しい」というメッセージを伝えてもらうように協力を求めましょう。「そんなことをしたら先生に叱られるよ」といったマイナスイメージは、特に1年生にはあまり伝えないようにしてもらいましょう。

保護者が子どもに関心を持ち、自信を持たせることも心掛けてほしいことの1つです。幼児期に比べ、学校では何かと友だちと比較をされて自信を失いやすいものです。保護者が「大丈夫だよ。諦めないで取り組むことが大切なんだよ」と、自信を持たせるメッセージを送り続けることが大切になります。

忘れ物があると学校で仲間に入れないため、家庭で準備の見通しを持たせることも大切です。更に、早寝早起きをし、ゆっくり朝食を食べてしっかりと栄養をとり、落ち着いて学校で過ごせるようにすることも保護者の役割であることを伝えるとよいと思います。

校長先生の役割

保幼小連携・接続は子どもに沿った授業をつくるための学びの場

ここまで述べてきたように、学びに向かう力を育む上で接続期の教育は極めて重要ですが、保幼小連携・接続の取り組みはまだ十分に進んでいません。要因の1つは、保幼小連携・接続は低学年の担任の問題だと捉える傾向があるからかもしれません。しかし、保幼

小連携・接続は学校全体の課題です。

中・高学年になると自信の持てない子どもが出てくるようになりますが、園児と交流することで自信を付けたり、新たな良さが表出したりすることはよくあります。また、保幼小連携・接続は「縦」のつながりだけでなく、PTA、地域といった「横」の広がりもあります。幼児など異年齢の子どもとの交流をきっかけに、人とかわることが出来る子どもが育ちます。このように、学校全体をコーディネートすることが校長先生の役割であると意識していただきたいと思っています。

少子化が進み、小学校の規模が小さくなりつつあります。そこで、異なる視点から子どもを見てくれる存在として、幼稚園や保育所の先生にサポーターになってもらってはいかでしょうか。幼保の先生は「その子どもにとってその活動はどのような意味があるか」という点で子どもの姿を捉え物語る力に優れています。授業を参観してもらえば、指導のねらいや技術とはまた違った観点で子どもの育ちを見てくれるでしょう。そのような活動の推進も校長先生にお願いしたいと思います。

保幼小連携・接続は、最初はどうもいかにいかもありません。「子どものために」と思って少しずつ進めるうちに、つながりが生まれていきます。子どもに沿った授業をつくるための重要な学びの場となると考え、ぜひ取り組みを深めていただきたいと思っています。